様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２１９

研究課題名（和文）懐徳堂をめぐる学術交流の思想史的研究

研究課題名（英文）Intellectual Interaction Amongst Scholars Centering on Kaitokudo School

研究代表者
清水　則夫（SHIMIZU, Norio）

明治大学・理工学部・専任准教授

研究者番号：３０５８０８４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：当初の懐徳堂は折衷的だったが、五井蘭洲以後は朱子学の立場から他学派を批判する。特に徂徠学と闇斎学に対する見解と名分論に着目することで、蘭洲と中井竹山の思想的変遷を跡付けた。蘭洲の徂徠学派批判に見える名分論は、自国への忠誠と国内秩序への服従を重視する点で闇斎学派とほぼ同一で、闇斎学派を評価する事例もある。しかし竹山の名分論は、忠誠や秩序と漢文作文の整合性が重視され、「文」の重要性が高まっており、闇斎学派評価も一貫して低い点が蘭洲とは異なる。
また懐徳堂周辺に成立した学者間ネットワークが、しばしば学派区分とは無関係に広がったことを明らかにしたが、ここにも「文」が関係すると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果の学術的意義は、次の三点にある。第一に、従来研究が手薄だった、十八世紀中盤の儒教を対象とした点。十八世紀思想史では徂徠学や国学、寛政異学の禁に関心が集中し、その他の動向は軽視されてきたが、本研究はその点に着目した。第二に、懐徳堂を朱子学の拠点として、同時代思想史に位置づけようとした点。懐徳堂の評価は、一部の特殊な思想家を近代的観点から評価する傾向が強かったが、本研究は敢えて朱子学と同時代性に焦点を当てた。第三に、懐徳堂の通時的変遷を明らかにした点。五井蘭洲以後、懐徳堂が朱子学を基調としたことは周知の事実だが、朱子学思想の変遷を明らかにした研究は、これまで存在していない。

研究成果の概要（英文）：Our project's aim was the examination of the shifting ideas amongst Kaitokudo scholars as seen in their criticism of other schools of thought. Whereas in its beginning the Kaitokudo had no established intellectual position but was rather eclectic in its approach, Goi Ranshu, even though as an adherent of Neo-Confucian thought, criticized the school of Ogyu Sorai in his regard of the notion of meibun (moral obligations according to one's name and function in society), which implied to him the practice of both, loyalty to one's country and the submission to the domestic political order. Nakai Chikuzan, on the other hand, considered terminology (bun) to be of great importance and thus brings him in terms of thought closer to with Sorai on this account. We also investigated the scholars' networks centered around the Kaitokudo. Next to intellectual interaction, we identified networks that went beyond the immediate community and kinship relations and disregarded the ideological differences.

研究分野：思想史

キーワード：懐徳堂　朱子学　陽明学　『春水日記』　龍野藩

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

18 世紀の儒学思想史は、徂徠学の登場とそれへの反発を通じ、折衷学や考証学が多彩な展開を見せながらも、「寛政異学の禁」にて朱子学が官学化され中央教学が確立する、という流れで理解されてきた。しかしこうした見方では、異学の禁に至る流れも、寛政期以降の儒学思想史の特色も描き出せない。この原因は、徂徠学が注目を集める一方で、朱子学や陽明学は不当に無視されてきた点にある。また従来の研究は学派・学統に拘泥するあまり、視野が狭くなっている点も問題であった。

２．研究の目的

18 世紀の日本における思想史の展開を、思想分析と人的交流という複眼的視点から再検討し、新たな 18 世紀思想史像を提示することを目的とし、具体的作業としては、大阪の懐徳堂を軸として展開された、西日本における儒学者の交流を、各学者の多様な思想的背景と関連づけつつ明らかにする。

３．研究の方法

(1)五井蘭洲の他学派批判を分析し、蘭洲の闇斎学派および陽明学派評価の実像とその意義を明らかにする。また蘭洲と中井竹山の朱子学思想の相違を明らかにする。
(2)頼春水の交友関係から、懐徳堂を軸とする人的ネットワークの実態を明らかにする。
(3)当該期の西国諸藩の藩儒の出自と交友関係を調査し、彼らの社会的存在様態と思想形成における交流の意義の一端を明らかにする。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

他学派批判に注目した結果、懐徳堂の思想的変遷と同時代における思想的立場が明らかになった。陽明学派批判は、五井蘭洲において最高潮に達する。これは蘭洲により懐徳堂の朱子学一尊の立場が確立したことを裏書きする。徂徠学派と闇斎学派に対して、中井竹山はともに批判したが、蘭洲は闇斎学派に対し同情的な面を持つ。これは両者の名分論の相違に由来する。蘭洲の名分論は闇斎学派とほぼ同一だが、竹山は名分論を漢詩文の作文と関連付け、蘭洲以上に「文」を重んじていた。

また『春水日記』と龍野藩の事例から、懐徳堂周辺に成立した学者間ネットワークは、しばしば学派区分とは無関係に広がったことを明らかになった。こうした交流が可能になった背景にも「文」が関係すると考えられる。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

研究成果の学術的意義は、次の三点にある。第一に、従来研究が手薄だった、十八世紀中盤の儒教を対象とした点。十八世紀思想史では徂徠学や国学、寛政異学の禁に関心が集中し、その他の動向は軽視されてきたが、本研究はその点に着目した。第二に、懐徳堂を朱子学の拠点として、同時代思想史に位置づけようとした点。懐徳堂の評価は、一部の特殊な思想家を近代的観点から評価する傾向が強かったが、本研究は敢えて朱子学と同時代性に焦点を当てた。第三に、懐徳堂の通時的変遷を明らかにした点。五井蘭洲以後、懐徳堂が朱子学を基調としたことは周知の事実だが、朱子学思想の変遷を明らかにした研究は、これまで存在していない。

以上の点から、十八世紀思想史として、また懐徳堂研究として、新しい見解を提出することに成功し、一定のインパクトを与えたと考えている。

(3)今後の展望

本研究の成果を拡充し、十八世紀思想史の見直しを進めたい。その具体的計画は、既に 2019 年度基盤研究(C)「18 世紀後半における「儒者」の総合的研究――頼春水とその周辺」(19K00118)として採択された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　４件）

①清水　則夫、懐徳堂朱子学之変遷―五井蘭洲与中井竹山、日本学研究、査読有、30 輯、2019、印刷中のため頁未定
②高橋　恭寛、日本陽明学派与懐徳堂諸儒者的思想交雑、日本学研究、査読有、30 輯、2019、印刷中のため頁未定
③浅井　雅、懐徳堂与西部諸藩的儒者―以龍野藩為中心―、日本学研究、査読有、30 輯、2019、印刷中のため頁未定
④清水　則夫、崎門における歴史と政治、アジア遊学、査読無、198、2016、171-183

〔学会発表〕（計　23 件）

①グラムリヒ・オカ　ベティーナ、Presentation of JBDB、AAS Digital Technologies EXPO、

2019.3.23
②清水　則夫、十八世紀前半唐津藩の学校と闇斎学派の抗争について―稲葉迂斎を中心に、日本経済思想史学会、2019.3.9
③グラムリヒ・オカ　ベティーナ、“Digital Approaches.”、Frankfurt University、2018.12.6
④清水　則夫、懐徳堂朱子学の変遷、2018 年度 科研費成果報告会 基盤研究（C）「懐徳堂をめぐる学術交流の思想史的研究」（研究課題番号：16K02219）、2018.11.23
⑤グラムリヒ・オカ　ベティーナ、日本の人名データベース(JBDB)：懐徳堂をめぐる親族関係を例として、2018 年度 科研費成果報告会 基盤研究（C）「懐徳堂をめぐる学術交流の思想史的研究」（研究課題番号：16K02219）、2018.11.23
⑥高橋　恭寛、日本陽明学派と懐徳堂儒者の思想的交錯、2018 年度 科研費成果報告会 基盤研究（C）「懐徳堂をめぐる学術交流の思想史的研究」（研究課題番号：16K02219）、2018.11.23
⑦浅井　雅、懐徳堂と西国諸藩の儒者たち―龍野藩を中心として―、2018 年度 科研費成果報告会 基盤研究（C）「懐徳堂をめぐる学術交流の思想史的研究」（研究課題番号：16K02219）、2018.11.23
⑧グラムリヒ・オカ　ベティーナ、上智大学における資料保存と研究・教育での活用、南山アーカイブズ主催講演会（招待講演）、2018.11.21
⑨清水　則夫、江戸時代儒教史―以十七世紀為中心、第五届尼山世界文明論壇（招待講演）、2018.9.27
⑩グラムリヒ・オカ　ベティーナ、Presentation of project at Japanese Association of Digital Humanities、The Eighth Conference of Japanese Association for Digital Humanities、2018.9.10
⑪浅井　雅、桐原から立身した熊澤蕃山、桐原学区協働まちづくり協議会（招待講演）、2018.6.30
⑫グラムリヒ・オカ　ベティーナ、経済思想史と徳川後期の人的交流データベース、日本経済思想史学会（招待講演）、2018.4.14
⑬グラムリヒ・オカ　ベティーナ、A Woman in Transit: Gender and Mobility in Times of Change、Axel and Margaret Ax:son Johnson Foundation and the Ricci Institute of San Francisco University（招待講演）、2018.3.5
⑭グラムリヒ・オカ　ベティーナ、A Woman 's Network around 1800、Center for Japanese Studies（招待講演）（国際学会）、2018.2.22
⑮本村　昌文、江戸期における儒学の死生観、歴史と文学の講座、2018.1.20
⑯高橋　恭寛、京阪学術界の周辺―近江の藤樹書院―、北京外国語大学北京日本学研究センター 日本文化論研究報告会「日本思想史研究の最前線」、2017.12.30
⑰グラムリヒ・オカ　ベティーナ、江戸時代儒者のネットワークについて、第五回日本学ハイエンドフォーラム（国際学会）、2017.9.16
⑱浅井　雅、近世後期における藩儒・藩校研究―龍野藩を事例の中心として―、思想・文化フォーラム若手研究者研究交流会「江戸後期の思想史研究」、2017.5.27
⑲グラムリヒ・オカ　ベティーナ、Relational Database of the Edo Period、Digital Approaches in Japanese Studies（招待講演）（国際学会）、2017.5.25
⑳清水　則夫、五井蘭洲と崎門の関係について、日本儒教学会、2017.5.14
ほか３件

〔その他〕
ホームページ等
https://www.network-studies.org/#!/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：本村　昌文
ローマ字氏名：（MOTOMURA, masahumi）
所属研究機関名：岡山大学
部局名：ヘルスシステム統合科学研究科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80322973

研究分担者氏名：グラムリヒ・オカ　ベティーナ
ローマ字氏名：（Gramlich-Oka, Bettina ）
所属研究機関名：上智大学

部局名：国際教養学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：60573417

研究分担者氏名：高橋　恭寛
ローマ字氏名：（TAKAHASHI, yasuhiro ）
所属研究機関名：東日本国際大学
部局名：東洋思想研究所
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：70708031

研究分担者氏名：浅井　雅
ローマ字氏名：（ASAI, miyabi ）
所属研究機関名：神戸大学
部局名：国際文化学研究科
職名：協力研究員
研究者番号（8 桁）：80782010

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。